社会・環境部会セッション

2020 年度社会・環境部会賞受賞記念講演
2020 Award Commemorative lecture of Social & Env.Div;

(1) 福島第一原子力発電所事故の復興

(1) Reconstruction after the Fukushima nuclear accident

*越智 小枝

東京慈恵会医科大学

1. はじめに

福島の原子力発電所（原発）事故から 10 年。コロナ禍の影響も相まって、福島の話は風化した、と言う人も少なくない。ではその風化の後には、何が残るのだろうか。

この 10 年来考え続けてきたことは、東日本大震災と福島の原子力災害が将来どのような歴史として語り継がれるのか、ということだ。歴史は事件の直後ではなく、その後を生き、学ぶ人々によって作られる。不幸な人々や過激な出来事だけを記した歴史は未来の災害の役には立たないだろう。むしろ地道に、かつ強かに復興を続けてきた方々の本当の知恵を残したい。それは今も変わらない私自身の行動原理だ。

原発事故という事件にはある程度の区切りがつけられつつあるが、災後の歴史は今なお完成したとは言えない。この 10 年の事象を普遍的な知恵へと翻訳し、原発事故を単なる不幸な出来事ではなく復興という正の遺産として後世に残して初めて原発事故は歴史になるのではないだろうか。そしてその歴史の主演は、何をにおいても地域の住民の方々である。

2. 復興を支える住民の力

福島の「人」から学ぶ知恵とは何か。一つは、先の見えないリスクの中で日常を暮らすことだ。

災害後に安全の指標としての数値や理論は必要だ。しかし安全設計のために必要な情報と、実際のリスク選択が行われる暮らしの中で必要な情報は時に大きく異なる。放射線量が基準値以上・以下という議論は「結局この山菜は食べていいのか」という疑問に答えられないからだ。地域の文化を知らない限り答えることのできないこれらの疑問に対し、人々は自身の中に刻まれた歴史や文化を発露する形で回答を模索してきたように見える。それこそが復興を支える災害へのレジリエンスであり、人の歴史ではないだろうか。

これは今般のコロナ禍にも共通する問題だ。今、人々が求めているものは新型コロナウイルスが空気感染するか否かの議論ではなく「結局私は外出していいのか」「結局あの人に会っていいのか」という暮らしへの回答であり、その答えは、実は自分の中にしかない。リスクの中で自分なりの暮らしを形作る方法を、我々は改めて浜通りから学ぶ必要がある。

もう一つの力は、風評被害や差別に抵抗する力だ。

専門家たちの策定する基準値という線引きは、必ず「基準値超え」という差別を生み得る。つまり数値を用いて安全性を証明しようという活動が却って差別を引き起こし得るということだ。専門性が生み出したこの差別に対し、福島は今もなお世界を相手に戦っている。今ようやく東京の市場でも福島の桃や胡瓜を普通に見かけるようになった。それまでの紆余曲折もまた、後世に残すべき復興の歴史の一部ではないだろうか。

同様の差別は新型コロナウイルスに対する「全例 PCR 検査」「飲食店の自粛要請」でも起きている。科学技術が生み出した検査差別、ワクチン差別、職業差別にどのように向き合うのか。そのヒントを得るためにも、この 10 年の福島の人々の歴史を紐解いていく必要がある。

3. おわりに

震災から 10 年たった今なお、福島原発事故は「これから作られる新しい歴史」だ。10 年来の人の歴史を再発見し、「いま・ここ」に活かすことこそが、この災害を正の遺産とするための最後の試金石だと考えている。

*Sae Ochi